



法学部独自の奨学金制度
「やる気応援奨学金」を利用した
学生の体験をご紹介します



ボン大学サマーコースのクラスメートと

目的はドイツ語の鍛錬と ボランティアの実情を知ること

今回、私は「やる気応援奨学金」を受給して、2017年8月1日から1カ月間、ドイツ・ボンでの語学研修に参加し、災害時や災害に備えて活動するドイツの政府系機関を訪問してインタビューを行いました。

私がドイツへの留学に至った理由は、主に二つあります。

一つ目は、中学・高校時代から外国語の学習や海外と関わりを持つことが好きで、大学時代に海外留学をして生の外国語に触れ、自分の実力を試したいと思ったからです。私は、高校時代に第二外国語としてドイツ語を1年間学習し、ドイツの家庭にホームステイをした経験があります。当時、私のドイツ語の実力は不十分で、英語に頼りきりになってしまい悔しい思いをしました。その経験から、大学でも第二外国語にドイツ語を選択し、留学先をドイツにしたのです。

そして二つ目は、ドイツに災害時や災害に備えて活動する Technisches Hilfswerk (以下 THW) という政府系機関があると知ったからです。私は、大学1年次から災害に関するボランティアに携わっているため、日本国内のみならず、海外の防災や災害に対する意識や、行政機関と民間機関の連携について興味を持ち、実際にドイツで話を聞きたいと思いました。

ドイツ語のプレゼンで 達成感を得る

私は、ドイツ・ケルンの南部に位置する、ドイツの旧首都・ボンに滞在し、ボン大学のサマーコースに参加しました。このコースを選んだ理由は、THWが初めて支部を置いたのがボンであったこと、コースに参加する学生との交流の機会が多かったこと、大学の本校舎がとても魅力的だったことなどが挙げられます。事前テストの結果、私は下から2番目のクラスに振り分けられました。留学前は語彙力とヒアリングに不安を感じており、実際、授業でもわからない単語が多々あったため、その都度メモして疑問点は質問するように努めました。ドイツ語の授業は平日の午前中に3時間あり、午後は

自分の進みたい道が見えた、ドイツでの経験

いわもと りさこ
岩元 理佐子

法学部法律学科3年
神奈川県立横浜国際高校出身



ドイツ・ボンで語学研修に参加

研究機関やボンをはじめとするドイツの都市の歴史について学ぶ課外学習がありました。ドイツ語の授業の内容は、主に文法と書き取りとスピーキングでした。文法は日本で学習していたので理解できましたが、いざドイツ語で話すとなると思うように言葉が出ず、もどかしさも感じました。印象的だったのは、コース終盤の授業で各自が母国の文化についてプレゼンを行ったことです。私の日本食についてのプレゼンがクラスメートに伝わったときは、大きな達成感を感じました。さまざまな国の人とドイツ語を通して交流ができ、毎日ドイツ語に触れて学習できたので、サマーコースに参加したことで得られたものは多かったです。

ボランティアを活かした 画期的な仕組みを知る

私は、研究テーマとしてドイツの防災や災害時の対応に興味を持ち、政府系機関であるTHWにインタビューを行いました。この機関は、スタッフ全体の99%がボランティアで、残りが公務員という点が特徴的です。THWはドイツ国内・国外での災害時にボランティアを派遣します。ボランティアは、自身の仕事の後や土日に、規定の時間



Technisches Hilfswerkの広報担当の方と

以上の訓練を行っているプロフェッショナルです。このとき、ボランティアは仕事を休むことになりませんが、彼らに対してTHWから給料が支払われます。このように、市民がボランティアに参加しやすい仕組みが行政機関により構築されているのは画期的だと感じました。日本では知り得ない情報を直接伺えたことは、本当にかげがえない経験となりました。

今回、奨学金を受給してドイツに留学したなかで、ドイツ語でうまく伝えられず悔しい思いもしましたが、それ以上にさまざまな人に出会い、助けられ、貴重な経験をたくさんしました。今回の経験を活かし、将来はドイツ語を使って外国と関わりを持てる職に就きたいと考えています。

最後に、留学にあたり相談に乗ってくださったすべての方々はこの場をかりて御礼申し上げます。

ご挨拶

法学部事務室
小野沢 正悟



入 学センターから異動して参りました小野沢正悟と申します。前の部署ではオープンキャンパスなどの企画・運営を担当する傍ら、全国各地の進学相談会などで受験生や保護者の方へ本学の魅力を伝えてきました。将来の夢を語ってくださる方も多く、本学でどのように夢を実現するか、ともに考えるのは楽しいものでした。法学部事務室では、引き続き夢に向かって進む学生と出会う一方、壁にぶつかっている学生との出会いもあります。そんな学生に対して職員ができることは、事務的なアドバイスはもとより、対話なのではないかと感じています。どんな思いを抱えているのか、本当にしたいことは何かなど、じっくりと対話をしないとわかりません。ご子女の一番の理解者であるご父母の

皆さまも、折々で大学生活について対話の機会をもつていただけると非常に心強く感じます。また、普段なかなかそうだった機会がない方も、この年末年始にそのような時間を作っていただければ幸いです。大入学は決してゴールではありません。入学前に抱いていた夢が入学後に変わることは珍しいことではありませんし、大学生活のなかでそれを見つけることもできます。本学はそれを支える環境が充実しています。学修環境はもちろん、各種資格講座、キャリアサポート体制、アカデミックアドバイザー制度や学生相談窓口など、多方面から学生をバックアップする体制や学びの場があります。ご子女の学生生活が充実したものであるよう精一杯支援いたしますので、よろしく願いいたします。